

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第二11:16～33 「キリストのしもべのしるし」

[16-18]「くり返して言いますが、だれも、私を愚かと思っはなりません。しかし、もしそう思うなら、私を愚か者扱いにしないでください。私も少し誇ってみせます。これから話すことは、主によって話すのではなく、愚か者としてする思い切った自慢話です。多くの人が肉によって誇っているのです、私も誇ることにします」

コリント教会の人々には使徒たちの誇りや自己宣伝に惑わされていた。彼らがあるべき正しい所に引き上げるには、パウロ自身まずそこまで降りていく必要があった。それで彼は自ら愚かなことであると知りながら、自分の様々な経験を語っていく。このようにして彼はコリント人たちを矯正しようとするのである。

[19-20]「あなたがたは賢いのに、よくも喜んで愚か者たちをこらえています。事実、あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、だまされても、いばられても、顔をたたかれても、こらえているではありませんか」

パウロは19節でにせ使徒たちを愚か者とし、コリント人たちを賢い者とし、それなのによくも喜んで愚か者たちをこらえていると皮肉を込めて言う。20節の「だれかに」とはもちろん、にせ使徒たちのこと。「奴隷にされても」は思いのままに動かされていること。「食い尽くされても」は不当な要求や献金を強いられ、困らせられること。「だまされても、いばられても」はそのままの意味。「顔をたたかれても」は侮辱、あるいは文字どおりの意味か。にせ使徒たちにこのような目に合わされてもコリント人たちは何もしないでこらえていた。これはもう謙遜ではなく盲従である。

[21]「私たち」と複数になっているのは彼の同労者テモテやシラスなどのことを含めて言っているのであろう。パウロはここでのにせ使徒たちと比べて「私たちは弱かったのです」と皮肉を込めて語っている。にせ使徒たちが誇るにまかせ、本物と偽物の区別がつかなくなっているコリント人たちには「誇り」というレベルで判断してもらい以外にはないとパウロは考え、あえて愚かになって自分の労苦、苦難を語っていく。

[22]にせ使徒たちは自分たちの資格としてここに記されている三つのことを主張していたと思われる。第一はヘブル人であること。これは先祖以来のヘブル語を知っており、使うことのできるユダヤ人であるということ。当時は国際語であるギリシヤ語しかしゃべれないユダヤ人が多くいた。第二はイスラエル人であること。これは神が特別に選ばれた民であるということの意味する。彼は小アジアのキリキヤのタルソの生まれであったが生粋のイスラエル人であった。→ピロ¹3:5 第三はアブラハムの子孫であるということ。これはイスラエル民族の祖先アブラハム直系の子孫であるということであり、神がアブラハムに対してなされた大いなる祝福の相続人であるという意味。これらのことについて、にせ使徒たちは自分たちの優越性を誇ることはできないのである。

[23]さらに第四の点として、キリストのしもべであるということ。ここに至ってパウロは自制の糸が切れ、狂気した者のように言う。「私は彼ら以上にそうなのです」にせ使徒たちは口先では立派に言うことができるが、そこには何の裏付けもない。それに対してパウロの示す証拠はそのキリストのための労苦というしるしなのである。彼は投獄、むち打ち、死に直面したこともしばしばであった。

[24-27]「使徒の働き」を読むと彼の受けた様々な苦しみがかかれていますが、この24節以下のパウロの労苦の一覧表を見ると、それらはほんの一部だけだったようである。「ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度」…これは申命記25:1～3によれば40回が限度であり、数え違いがあるといけないので、39にしたといわれる。多くの者はこの刑で死に至った。「むちで打たれたこと」…異邦人から。「石で打たれたこと」…神を冒瀆したものに課せられた。ステパノはこの石打で殉教した。→使徒7章、^レ24:14～16 「たびたび眠られぬ夜を過ごし」…主の働きのためや祈りのために徹夜をした。……………。

このような労苦をパウロはキリストのために喜んで忍んだ。それがキリストのしもべの本当の証拠なのである。これに比して、にせ使徒たちはどうだったのであろう。

[28-31]27節までにあげられている様々な苦難のほかに、日々彼に押しかかるすべての教会への心づかいがあった。コリント教会に関する心配もその一つである。そのような教会でだれかが弱っているならば、その人に対する思い、同情で自分も弱らざるをえない。また、だれかがつまずいているならば、心が激しく痛む。これほどまでに彼は教会のために労し苦しんでいる。にせ使徒たちは自分の内的なものを誇るが、パウロはもし誇る必要があるならば、今まであげてきたような自分の弱さを誇ると言う。そして実際キリストの力は肉적인誇りではなく弱さのうちに現されるのである。→Ⅱコリ12:9 そしてこれらのことが偽りでない証拠に、彼は31節で「主イエス・キリストの神、永遠にほめたたえられる方」を証人に呼び求めているのである。

[32-33]自分の受けた苦難を語ってきたパウロはここで彼が一番最初に回心した直後の経験にさかのぼって語る。アレタ王とはバプテスマのヨハネの首をはねたヘロデ・アンティパスの義父で当時ダマスコ地方一帯を支配していた王であった。パウロはそこで命をねらわれ、城壁の窓からかごでつり降ろされて逃げなければならなかった。→使徒8章。これは彼に対する最初の迫害であり、そのことは彼の心に焼きついて離れなかったことだろう。このようにパウロは至る所でキリストのゆえの苦難を受け、弱さを示したが、しかし、神のみが彼の力であり、イエス・キリストのみがその拠り所であった。

私たちもパウロの姿に学び、権力、金力、肉の力により頼むことなく、ただ信仰のみに立ち、弱さを誇りつつ、そこに神の力、神の栄光が現されることを願って歩んで行くことが大切である。